

平成 28 年 第 11 回飯坂総合文化祭報告

——解説編(古さと絵画、木炭生産、化石、縄文土器)所収——

報告：大滝会

(文責・写真 特別会員 鹿摩貞男)

〈第 11 回飯坂総合文化祭〉

日時 平成 28 年 11 月 12 日 (土) 9:30～11 月 13 日 (日) 15:00

場所 福島市飯坂学習センター



出展にご尽力された大滝会の皆様

後列(左から) 鹿摩貞男特別会員(報告者)、 榎木新吉会計役員(兼副会長)
前列(左から) 木村義吉会長、 渡辺光義役員、 高野英治副会長、 伊藤弘治役員

昨年度に引き続き今年度も大滝会は飯坂総合文化祭に出展しました。今年は、次のようなコンセプトで展示しています。

1. 大滝出身者が描いた「古さと絵画」
2. 「早春の大滝と木炭ができるまで」パネル
3. 炭焼き道具
4. 太古の大滝(産出(出土)した化石・銅鉱石等、縄文土器)
5. 大滝の風景写真

今年も木村義吉会長、高野英治副会長をはじめ役員の皆様が資料の収集や展示パネル等の作成をおこなっております。皆様のご努力に敬意を表します。

会場では、多くの方々が熱心に見学され、各種の質問があり役員の皆様が丁寧^{ていねい}に説明しております。中には、万世大路に関する図書を持参され それを説明者の大滝会伊藤弘治役員に紹介しながら見学されている方もおられたとのことです。【写真-1~12】



【写真-1】① 福島市飯坂学習センター
(総合文化祭会場)



【写真-1】② 飯坂学習センター前の道路の紅葉



【写真-2】① オープニング演奏「飯坂太鼓」
(飯坂太鼓保存会)



【写真-2】② 福島市ご当地キャラクター「ももりん」登場



【写真-3】① 総合文化祭会場



【写真-3】② 総合文化祭展示場全景(一階支所前通路)



【写真-4】 大滝会ブース全景



【写真-5】① 古さと絵画(1)、大滝集落風景画



【写真-5】② 古さと絵画(2)、大滝集落風景画



【写真-6】 「大滝の早春」と「木炭のできるまで」パネル



【写真-7】 炭焼き道具の一部



【写真一8】 大滝の古代 出土(産出)品等(貝の化石等、縄文土器・打製石器、銅鉱石)



【写真一9】① 見学者



【写真一9】② 見学者



【写真一9】③ 見学者



【写真一9】④ 見学者



【写真一10】 大滝会の皆さん



【写真-11】 飯坂町史跡保存会ブース



【写真-12】① 作品目録表紙

作品名	作者名	作品名	作者名
①飯坂町史跡保存会 <small>飯坂町史跡保存会出品の展示 ぜひ、土木遺産に興味を持っていただきたいと思ひます。</small>		②大滝会 <small>昭和40年頃まで約40戸が在りましたが、今は廃郷になりました。当時の思い出の写真・絵画等を展示しています。 土木遺産となったトンネルなどの絵</small>	
	小栗俊男 ほか4名	木村義治 3点 写真10点	木村義治 ほか 会員の皆さん
③如月書道会 <small>月に5回ある種書日小筆から大筆まで 様々な筆を習得している一冊です。</small>		④飯坂野草会 <small>季節に合わせて育てた秋の山野草をご鑑賞ください。 種類なども違ってくるので。</small>	
飯坂町	曾野秋枝	山野草(鉢植え)	佐藤康英
七言二句		山野草(鉢植え)	奥野善昭
雑字		山野草(鉢植え)	小野耕司
七言二句	齋藤史穂	山野草(鉢植え)	穴戸一郎
七言二句		山野草(鉢植え)	手塚ハツ子
福元集造		山野草(鉢植え)	
五言絶句	渡辺彩世		
七言二句			
半紙			

【写真-12】② 作品目録抜粋 (②大滝会他)

なお、今年は特に貴重な資料や写真の展示・証言があったので、おこがましい限りですが若干の解説を付しながらそれらを解説編として個別に掲載しました。

【解説編】

はじめに

今回出展した出展物に関して下記の通り^{ちきつ}稚拙で申し訳ありませんが解説を試みました。出展会場では写真をうまく撮影できなかつたこともあり、それぞれの出展物について別途個別に撮影させていただくなどご協力を頂き今回掲載したところです。

解説項目は次の通りです（なお、「風景写真」については解説していません）。

1. 大滝出身者が描いた「古さと絵画」
2. 「早春の大滝と木炭のできるまで」パネル
3. 炭焼き道具
4. 太古の大滝（産出（出土）した化石・銅鉱石等、縄文土器）

（「巻末参考図一1」、「巻末参考図一2」参照）

1. 大滝出身者が描いた「古さと絵画」

大滝ご出身の女性の方が懐かしき「古さと」大滝集落を見事な水彩画で描いています。HP掲載について作者の快諾を得ましたので紹介します。【**絵画一1～7**】

（【**絵画一8**】は別作者）



【**絵画一1**】 No.1「ニツ小屋隧道東口近くで」



【**絵画一2**】 No.2「渡辺家のある家並み」



【**絵画一3**】 No.3「くるみ平の作者の家周辺」



【**絵画一4**】 No.4「くるみ平の渡辺家(中屋)周辺」



【絵画一5】 No.5「くるみ平の作者の家の近く」



【絵画一6】 No.6「大滝の家並(冬)」



【絵画一7】 No.7「木炭組合事務所(冬)」



【絵画一8】 No.8「在る日の大滝」

2. 「早春の大滝と木炭のできるまで」パネル

まず春を待つ大滝集落の貴重な風景写真を展示しました。

次に木炭生産に励む大滝住民の姿と木炭の生産状況についての写真とそれを説明したパネルを展示しています。パネルは、最初にその炭焼き用の窯づくりから紹介し、原木の伐採から木炭が焼き上がるまで、さらにその搬出に至るまで炭焼き経験者（木村義吉会長、高野英治副会長）による説明と貴重な写真とで構成したものです。

木炭の生産は、大滝集落の生業として住民の暮らしを長年に亘り支えたばかりでなく、かつての日本人の家庭エネルギーをまかないその生活を支えた重要な産業であった。しかし、灯油やガスの普及によるエネルギー革命によってその地位を奪われ大滝の製炭業も衰退し集落の過疎化そして消滅に至ったのである。

全盛期の昭和 32 年には年間生産量 22,300 俵 (15kg/俵 (昭和 25 年頃以降))、生産額 8,580 千円に達していた。大滝の木炭は固くて火持ちが良く品質が高いと評価され品評会ではいつも上位入賞をはたし消費者の評判もすこぶる良かったと云う。昭和 33 年、木炭生産者 21 戸 134 人 (昭和 35 年全戸数 32 戸、190 人、紺野文英 HP 管理人調べ)、昭和 34 年には大滝製炭組合 (組合長高野孝治氏) は知事表彰受賞、翌 35 年には全国木炭生産者大会において「日本農林漁業振興会長賞」を受章する荣誉に輝いている。

明治 32 年 5 月の奥羽線の開通により万世大路の宿駅としての役割を終えた後に、大滝集落の製炭業は、生活の糧^{かて}として住民の本業となり大正・昭和を経て苦勞を重ねながら定着してきていたものであった。しかし前記の通り時代の流れの中で製炭業は衰退を余儀なくされ、昭和 43 年 6 月には大滝製炭組合も解散し昭和 51 年頃には数軒の家で自家用として細々と炭焼きを続けていたけれども、昭和 54 年 10 月大滝集落の閉郷と共に文字通り炭焼きの灯は消えた。

半世紀前の昭和 41 年 (1966 年) 5 月 29 日に現国道 13 号栗子国道 (栗子ハイウェイ) が開通した。その当日の貴重な写真がある。場所は、大滝第 2 トンネルと東栗子トンネルの中間辺り二ツ小屋地区になると思われるが、旧道側にある炭焼き小屋からモクモクと煙が出ているのが見られる。この頃はまだまだ木炭生産がおこなわれていて、その日の糧を得るために黙々と大滝の方たちは働いていたのであろう。【参考写真-1】



【参考写真-1】 国道 13 号開通式当日 (S41.5.29)、東栗子トンネル福島側二ツ小屋地区。自動車走行は新国道、そのが上旧国道。福島側を望む。「栗子ハイウェイ開通 50 周年記念シンポ」資料より。株式会社川島印刷提供

「この秋は 雨か嵐か 知らねども 今日の勤めに 田草取るなり」(伝 二宮尊徳)

(大滝に水田はなかったなので今日の勤めは炭焼きということになるのか。

むかし断食道場でならった編者の記憶にある和歌、出典は不明。)

さて、一連の炭焼き作業 (原木準備、炭焼き、窯出し、輸送等) は大変な重労働で、その上夏は遠いところで 8~10 km (冬は 4~5km) 自宅から離れた山奥に歩いて向かうため日の出前に家を出るのがつねであり、夕闇迫る頃男性は 4 俵 (木炭ネット 60kg、風袋込約 80kg)、女性は 2 俵 ((木炭ネット 30kg、風袋込約 40kg) の炭俵を背にして家路に着くという過酷なものであったという。(参考『わが大滝の記録』昭和 52 年 1 月)。

この度の文化祭においては、かつておこなわれたその炭焼き作業の貴重な記録をパネルに展示したものであり【写真-6 参照】、今回改めて写真と説明文を以下に示すこととします。

なお、説明文は木村義吉大滝会会長によるもので、写真は高野英治副会長【写真炭焼-1~7】及び木村会長【写真大滝-1、写真木炭-8~9】の提供によるものです。ご両人とも炭焼きのご経験者であり、

いずれもHP掲載については快諾をいただいております（説明文の一部について編集整理したものがああります）。

【パネルの写真及び説明文】

(1)大滝集落の早春風景(パネル1)

3月下旬でもまた雪が深い。前年11月下旬からジーンと我慢の季節だ。あと1ヶ月経てば、雪は消えて木々が芽吹く、桜が咲く、待ち遠しい、もうすぐ春です。

左上の奥に三角屋根、大滝分校が見える。その一段下に教員宿舎がある。

【写真大滝-1】 【参考写真-2】



【写真大滝-1】 早春の大滝地区昭和30年頃、人家が沢山あります。手前大滝橋



【参考写真-2】 初秋の現在の大滝地区、かつての人家は1軒もなし。H281009

(2)炭窯つくり・その1(パネル2)

炭焼き作業は、まずかまぶちと云って炭焼きするための白炭（编者注）専用の石窯つくりから始める。

我々は石窯といっているが石と粘土質赤土とで積上げてつくってゆく。窯の天井も同じである。窯は卵型で内幅狭いところで50cm、広いところで2m、奥行きは窯口から奥のクド（煙出し）まで2.5m、煙突状にして上のほうを小さく絞り込む。窯の外側には、近くの木材を切ってきて枠を組み、窯を積み上げながら枠との間（40～60cm）に裏詰め土石を入れて仕上げる。

【写真炭焼-1】



【写真炭焼-1】 手前両側に積んであるのが窯の口石。^{くちし}奥の小さい長方形の空間はクド（煙だし）。

编者注

白炭（はくたん） 蒸し焼きしてできた真っ赤な炭を窯から外に掻き出してシバイ（灰土）を被せて火を消してできた炭のこと。その表面が薄化粧したかのように白灰が付着しているのでその名がある（石窯製法）。木の皮などの不純物が取り除かれ品質のよい炭ができる。窯の中でそのまま火を消してできたものを黒炭（こくたん）という。

(3)炭窯づくり・その 2(パネル 3)

窯は、2～3 週間かけて完成させる。冬季間はさらに 1 週間余計にかかる。また窯をつくる場所によっては湿地の場合もあり水はけをよくする。石や赤土など材料（※）集めと、下準備の仕掛けがあるので炭焼き窯が出来上がるまでは数多くの作業がある。【写真炭焼-2】



【写真炭焼-2】 窯口の口石くちいしの積み上げ作業中。

※材料＝口石くちいし（窯口の両側に積み入り口を構成する石材）、入口（上下）を塞ぐフタ石、カケ石（両側の口石に掛けて天端とし窯口をつくる）、2 番カケ石、クド石（煙りだし）、積石、裏詰め用土石など、その山の周辺で調達する。

編者注

アマ石とカナ石 口石、クド石などには加熱された際に割れて撥ねないように柔らかい石質（これをアマ石と云う）を使用する。円部地区では良質のアマ石が採れるところがあったそうで荷馬車などで運搬したそうである。その他の材料は硬い石質（これをカナ石と云う）のものでもよい。

(4)窯づくり仕上げ(パネル 4)

窯ができあがると木をくべて燃やし窯を乾かす。窯づくりには、小屋づくりやその他いろいろな準備もありできあがるまでの間は収入がない（2～4 週間）。

炭窯が乾いて完成すると、いよいよ炭の原木をいれ窯口から焚きつけることになる。

【写真炭焼-3】



【写真炭焼-3】 木を焚いて窯を乾かしているところ（窯をつくるときに設置した木枠や支保材も併せて燃やす）。

編者注

炭窯の数 炭窯は、夏山（大滝自宅から 8～10km）・冬山（大滝自宅から 4～5km）と称し年 2 箇所つくる。原木は 1 年で枯渇するので、次の年には別の場所に移動し新に窯をつくる。原木山（国有林）は 30 年で一回りするよう、年 1 回営林局（当時）の原木の払い下げがあり山分けを決めたという。立木が炭焼き用材になるまでには 30～40 年必要である。

(5)立木の伐採と炭焼き原木づくり(パネル 5)

立木を切り倒して長さ 1.5m くらいに切り炭焼きの原木とする。太い木は斧で割って揃え、窯に立てて入れ詰めていく。窯口から火を燃やして焚きつけ窯口の上下にフタ石を立て隙間を

粘土で塞ぐ（小さな空気穴を付けておく）。【写真炭焼-4】①②



【写真炭焼-4】①原木の伐採



【写真炭焼-4】② 太い木は割る

(6) 窯だしとシバイかけ(パネル 6)

〈窯(炭)だし〉

クド(煙りだし)からの青煙も消え熱気だけになると窯(炭)だしのときである。

原木を丸一日かけて蒸し焼きにしてクドから出ている煙の色が変わるとクド口のフタ石を少しずつあげて木炭に精錬をかけて炭を硬くする。木炭がある程度的高温(真っ赤になりきらする)になったら窯口のフタ石(窯口の下半分)を取り払い、原木が炭化して真っ赤になったものをカギ棒(编者注)でほぐしカナイボリ(编者注)と称する道具で掻き出す。窯出し中は高温(窯の中は800度)なので、作業中はシャツ1枚または上半身は裸だ。

【写真炭焼-5】①



【写真炭焼-5】① カナイボリで窯(炭)だし作業中。

编者注

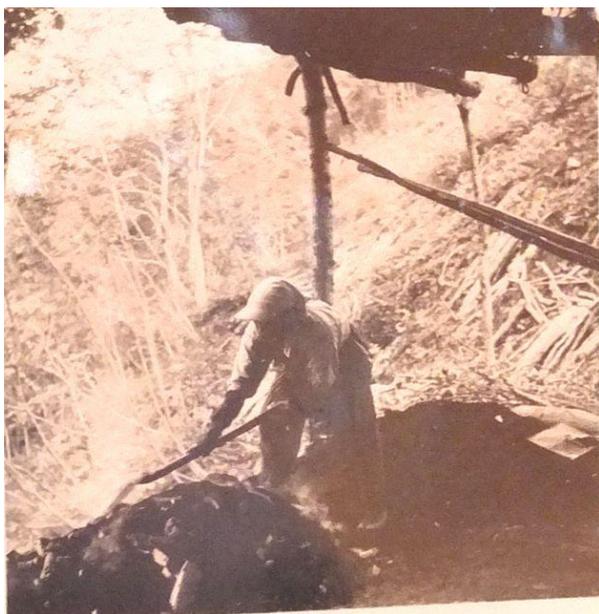
- 1 **カギ棒** 木製の柄の先に、先端が鉤形になっている鉄棒を取り付けたもの。長さは炭窯の大きさにもよるが通常3~4mほどである。
- 2 **カナイボリ** 木製の柄の先に、山形になっている刃先を先端に付けた鉄棒を取り付けたもの。長さは炭窯の大きさにもよるが通常3~4mほどである。
- 3 **タテマダ** パネルの説明文には出てこないが炭焼きには「タテマダ」と云う道具も使用する。これは、木製の柄の先に、先端を特殊加工した鉄棒を取り付けた道具で、窯だし後のまだ熱くなっている炭窯に次の原木を詰めていくとき原木を立てるために使用するものである。長さはやはり3~4mである。このタテマダやカギ棒、カナイボリも地元(飯坂等)の鍛冶屋さんに特注してつくる。

〈シバイかけ〉

掻き出された真っ赤な炭を窯外からオオイボリ(编者注)と云う道具で手前の方に引っ張り、シバイ(编者注)と呼ばれる灰土を炭火にかけて消す。2時間ほど被せておくと木炭ができあがる。

このシバイかけ、そして木炭の掘り出しはかなりの重労働であったと云う。

【写真炭焼-5】②



【写真炭焼-5】② シバイかけ。

編者注

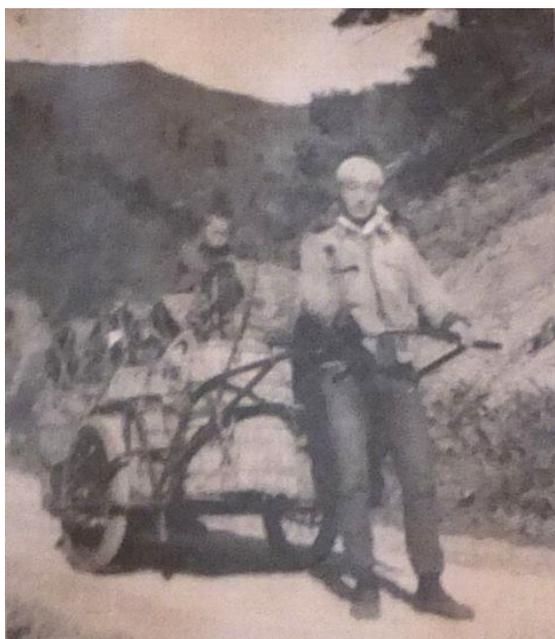
- 1 オオイボリ 現地で製作するもので、3mほどの木製の長い柄の先に長さ 50~60 cm、幅 20 cmほどの板(現地採取の丸太を割って加工)を直角に取り付けたもの。
- 2 シバイ(灰土) 炭焼き残りの灰に現地で採取した土(フルイを通したもの)を混ぜたもの。

(7)木炭の搬出(パネル 7)

シバイから掘り起こした木炭は、品質・大小別に分けて定量(棒ばかりで量る)を炭すご(炭俵)に詰め製品とした。

できた製品(炭俵)は、足場の悪い山道(1~3 km)や旧国道などを遠い場所で8~10 km(冬は4~5 km)を荷背負蓑にしよいみのに背負ったりリヤカーや荷車に積んだりして持ち帰る。背負う重さは男性4俵(風袋込約 80kg)、女性2俵(風袋込約 40kg)であった。昼の弁当を少し残しておいて、夕方残りを食べて元気を出して戻る。炭俵は、木炭倉庫(製炭組合)や自宅まで運び家族からは大歓迎を受ける。でも家に着くと疲れてくたくたになる。【写真炭焼-6】【参考写真 3-①②】

【参考写真-4】



【写真炭焼-6】 デドモダ沢辺りから山道を背負って来た炭俵をリヤカーに積み換えて運搬中(新沢付近の旧国道 13 号)。

編者注

木炭の運搬 後述の「ヒトデ化石」の中でも触れているので参照されたい。



【参考写真-3①】 木炭(炭俵)を背負って運搬開始、中野地区の日ノ峠(東栗子トンネルの上)の炭焼小屋にて。昭和 35 年頃。大滝会 榎木新吉副会長提供。



【参考写真-3②】 冬の炭焼き帰り 途中で炭を背負ったまま一休み 大滝会伊藤弘治役員提供



【参考写真-4】 炭すご(茅で作った木炭用入れ物の俵)編み、みんな自家製である。長老沢地区高野家(旧宮内屋旅館)前にて。昭和 30 年前後。一部修正 大滝会高野英治副会長提供。

(8)木炭品評会(パネル 8)

年一度木炭品評会を県が開催する。大滝の木炭は品質が良く毎年入賞し優秀な実績を残した。品質の評価は、炭の硬度や炭火が長持ちするかなどについておこなわれ、大滝の木炭は評価が高く、従って値段も良かった。【写真炭焼-7】①②



【写真炭焼-7】① 毎年開かれた県主催の木炭品評会。



【写真炭焼-7】② 毎年上位入賞を果たす。

(9) 国道除雪の共同作業(パネル 9)



【写真炭焼-8】 部落総出の人力除雪。
旧国道 13 号(旧大鍋橋付近)
米沢側から福島側を望む。昭和 30 年頃

陸の孤島と云われていた古さと大滝では、11月末から翌年4月中旬まで雪に閉ざされて生活はかなり厳しいものだった。長い冬、米などの食料や日用品が底をついてくると、それらを調達するための生活資金が必要になってくる。雪の中でも木炭を生産し倉庫にストックしてあるが、問屋に納品しなければ資金を得ることができない。そこで部落総出で国道(旧 13 号)の人力除雪をおこない貨物トラックが木炭倉庫まで入れるようにしなければならなかった。

【写真炭焼-8】

※昭和 32 年からは役所(福島県)のブルドーザーがきて除雪してもらった。

(10) 炭俵のトラック積み込み(パネル 10)

待ちかねていた貨物トラックが木炭倉庫にようやくたどりつき、みんなで見守るなか木炭を積み込む。これで一安心だ。【写真炭焼-9】



【写真炭焼-9】 葭沢地区木炭倉庫前、みんなが見守る中、炭俵のトラック積み込み。

3. 炭焼き道具

今回は木村義吉会長所蔵のもので、主に炭焼きの原木を伐採するための道具を展示しています。ナタの刃先に突起が着いているのは、間違っ足などに触れたとき直接刃先がいかないように安全を確保するためのものだそうで、また簡単なものを引っ掛けて取り上げるのにも便利だという。コシコと称するナタのサヤは、コカヅル(サルナシの木の皮)を使用した自家製のものである。のこぎりは、当時は本体しか売られていないので柄やサヤは自分で製作したと云うことである。

【写真道具-1】



【写真道具-1】 炭焼き道具の一部(原木伐採用)下から、
・ナタ ・ナタのサヤ ・鋸(ノコギリ)のサヤ
・まさかり ・鋸(ノコギリ)。



【写真道具-2】 立木切り倒し用まさかり。刃先が鋭角。

展示したまさかりは、立木切り倒し用のもので根本の方から刃先が鋭角になっている【写真道具-2】。薪割り用の場合は、刃の先端近くから角度がついていて鈍角になっている。

実際に山仕事をする場合のナタやのこぎりの装備状況を高野英治副会長さんに再現して頂きました。このような姿で原木を探していくのだそうである。【写真道具-3】



【写真道具-3】 ナタ、ノコギリの実際の装備を再現
(高野英治副会長)

4. 太古の大滝(化石や銅鉱石の産出、縄文土器の出土等)

栗子の山中でヒトデや貝の化石が出土すると云うのも不思議なことのようと思われる。太古この辺りは海底であったと云うものにわかには信じられない話しではあるけれども現実産出したものを見れば納得せざるを得ない。後で詳しく述べるが結論的に云うと化石が見つかる理由は次

のようである。地質時代区分で「新第三紀中新世^{ちゅうしんせい}」(約 2,400～500 万年前)と呼ばれる時代の初期～中期にかけて日本海ができたそうである。その頃我々の日本列島(東北日本)は現在のように陸上ではなく、まだ海底にあったようで中新世後期にかけて海成堆積物が堆積していきこれが約 600 万年前に始まる地殻変動より徐々に隆起して陸地化し日本列島が形づけられたと云う。その海底堆積物が栗子峠^{おお}を覆う新第三紀の岩質を形成しているということのようである。従って、栗子峠はかつて海底であったわけで、海の生物の化石が産出すると云うことになる。

次に時代はかなり下るけれども、大滝では縄文時代(約 15,000 年前～約 2,300 年前すなわち紀元節で表すと紀元前 13,100 年から弥生時代の始まる紀元前 400～500 年(各説あり)まで約 1 万年間続いた新石器時代のこと)の土器(石器)も出土し約 1 万年近くも昔から人が居住していたことが推測される。大滝は、原始時代の縄文人にとっても豊かな実りを与えてくれる楽園だったのかもしれない。

また、大滝では、明治 30 年代終わりから大正の初めにかけて鉱山ブームがあったと云う。中野鉱山や蛇体鉱山、大滝鉱山などで、銅鉱石が採れたが埋蔵量は少なく一過性に終わったようだ。これらの鉱山は戦後も細々と採掘がおこなわれたようで、その銅鉱石が今回展示されている。

【写真-8 参照】



【写真-8】 大滝の古代 出土(産出)品等(貝の化石等、縄文土器・打製石器、銅鉱石)

(1)ヒトデと貝の化石

〈ヒトデ化石の発見——炭焼き作業に関連して〉

ヒトデ化石産出場所と発見の経緯は次の通りである。なおここでは、化石の発見が炭焼きに関連してのことであるからその作業場所や製品搬出のことなどについても多少煩雑になるけれども併せて記述することとする。

さて、旧国道 13 号(万世大路)沿いに旧大滝集落があつてほぼ並行して小川(おがわ:1 級水系阿武隈川・1 級河川摺上川の右支川(県知事管理))が流れている。その小川の右支川(2 次支川)となる大滝川(大滝橋)が集落(大滝地区)を横断している【参考写真-5】。その上流に大滝側の左支川となる不動沢があつて、合流点(古屋敷)からしばらく上って行くと、左側の沢から有名な不動滝(大滝集落から約 3km 地点)が流れ落ちている。その上方(想定小字名谷地小屋)が通称「滝上^{たきうえ}」と称していたところだそうで炭焼きがおこなわれていた場所の一つである【参考写

真-6】。



【参考写真-5】 大滝川と大滝橋(3代目、L=10.5m、W=5.5m、S40.11完成)。上流側から望む。左米沢側、右福島側(通称カド地区側)。H280503



【参考写真-6】 不動滝(大滝川左支川不動沢の左側の沢)。手前が不動沢。大滝集落の赤岩道起点から約3km,1時間半。ヒトデ化石はこの上の頂上近くで発見。H250630

その滝上で、大滝会高野英治副会長さんが昭和35、6年頃炭焼き原木を探していて、たまたまアマ石(前記参照、炭窯の口石等に用いる)に適した岩塊を見つけたので、割ってみたところヒトデのような生物の化石が産出したという。ヒトデ(化石)と思われるものの寸法は18~19cmほどで比較的大きいものである。岩石は、見たところ堆積岩の一種で砂岩のように見える。これらは海底などに堆積して出来るものと云われるので、その辺りはかつて海であったところが隆起したところなのだろう。【写真太古-1】



【写真太古-1】 ヒトデのようなものと思われる化石。

因みに不動沢の最上流には、大滝集落の名前の由来となったと伝えられる“幻の大滝”がある

【参考写真-7】。



【参考写真-7】 幻の大滝(大滝川左支川不動沢の最上流)
大滝会 HP から転載。H210607
大滝会渡辺光義さん撮影

この辺り(想定小字名「大滝ノ上」^{おおたきのうえ})でも炭焼きがおこなわれたようで、冬には10尺(約3m)を超す積雪があり泊まりがけでの作業となったと云う(木村会長談)。この大滝の山裏(北側、想定小字名茂多沢^{もたざわ})に小川の右支川となるデドモダ沢(前茂多沢、方言:デド=手前)やイリモダ沢(奥茂多沢、方言:イリ=奥)があり、こちらでも炭焼きがおこなわれている。これらの場所でできた木炭(炭俵)の搬出は、両モダ沢の中間付近の小高い峰先に立てた支柱から、谷(小川、現国道13号)向けの旧国道13号脇(カエル岩付近仮称ビューポイント付近)に立てた支柱に鉄索^{てっさく}を張り炭俵を吊り下げて降ろしたと云う【参考写真-8】。旧国道からは貨物トラックで大滝集落の木炭倉庫まで運搬した。

鉄索は、現在の東栗子トンネルの福島側坑口付近の上空を通過していたようで、当時工事が始まった東栗子トンネル工事用のトランシーバーと木炭運搬用のトランシーバーとが混線して大変困ったという。【参考写真-9】【参考写真-10】



【参考写真-8】 カエル岩(左側)と道路(旧国道13号)の先が仮称ビューポイント・木炭輸送荷受け基地(鉄索支柱)。写真奥の山は谷(現国道13号、小川)向かいの茂多沢地区。H271122



【参考写真-9】 正面の山「茂多沢(小字名)地区」を山向い(手前)ニツ小屋側の旧国道連絡路(旧大滝運搬路)から望む。右側デドモダ沢、左側奥の山の後ろがイワイノ沢。手前は東栗子トンネル福島側坑口の非常駐車帯。H281204



【参考写真－10】 参考写真－9の右側(米沢側)、ほぼ同一箇所から望む。中央の出張ったところ(峰先)に鉄索荷送り基地の支柱設置、その左側がデトモダ沢、右側がイリモダ沢。右奥の山の後ろが「幻の大滝」位置。右下東栗子トンネル福島側坑口。H281106

若干くどくなるけれども、この化石出土地に関連してもう少し説明を続けたい。地元で呼称されている沢名等を伝承していく必要があると思うからである。前述のデトモダ沢の一山手前（福島側）の

小川下流にはイワイノ沢がある【参考写真－11】、【参考写真－9】参照。



【参考写真－11】 ニツ小屋国交省観測小屋付近から米沢側を望む。左側の山と中央の山の間がイワイノ沢、中央の山のうしろがデトモダ沢、アンテナ奥の山が851m峰、右端が904m峰と思われる。H281204

イワイノ沢は、旧国道13号新沢橋の架かる新沢の斜向かい（米沢側）にある。この辺りの推定小字名は祝沢（ユハイノサハ、字名は前記分を含め『福島の小字』福島市史資料叢書第38輯による）で、イワイノ沢の上流の山頂を越えて南側にいくと、前述のヒトデ化石の産出地があり不動滝に至る。このイワイノ沢辺りも勿論炭焼きがなされた場所であり、その製品（炭俵）の運搬のあたっては、炭俵4俵を背負い山道（自分らで造成した）を小川沿いに上流側に進み、小川には木橋を掛けて対岸（ニツ小屋）に渡り旧国道13号に出たと云う。そこからは、リヤカーなどに積み替えて大滝集落まで運搬したと云うことである（【写真炭焼－6】参照）。

なお、現国道13号沿いに流れる小川（おがわ：河川名）の南側には比較的高い山脈が東西に続いている。それらの山々の頂上を境に北側南側いずれも前述の通り炭焼きのおこなわれた場所である。その山脈は、東からイワイノ沢の上流に707m峰、デト（前）モダ沢及びイリ（奥）モダ沢の上流の851m峰そしてそれに連なる葡萄沢山（987.3m、東栗子トンネル）と続いているのである。

【参考写真－12】【参考写真－13】



【参考写真-12】 ニツ小屋側旧国道連絡路(旧大滝運搬路)から851m峰(上の山)を望む。左下の出張ったところ(峰先)の左側がデトモダ沢、右側がイリモダ沢。851m峰の後ろが幻の大滝(大滝の上地区)。右下東栗子トンネル福島側坑口あり。 H230206



【参考写真-13】 ニツ小屋側旧国道連絡路(旧大滝運搬路)から右上葡萄沢山(967.3m)を望む。左下東栗子トンネル福島側坑口(旧換気塔) H271122

〈貝の化石〉

カキ貝のようなものの化石は、高野副会長が戦前昭和17年頃、ニツ小屋地区の旧国道13号(万世大路)沿いで発見したものである【写真太古-2】。



【写真太古-2】 カキ貝のようなものと思われる化石

昭和の大改修(编者注:仮称、昭和8年4月~昭和12年3月に実施された万世大路の改修工事)で新に架設された新沢橋からニツ小屋隧道に向かうために新設区間をも含め「昭和の七曲坂(仮称)」が整備されている。産出地は、その「昭和の七曲坂」の7段目の道路の殉職警官之碑跡とオサ沢(御沢)との中間付近で、礫岩れきがんと思われる大きな岩塊が露出しているところがある。その辺りは貝の化石が見つかることよく知られているところだそうである。もっとも编者が辺りを探した限りでは文字通り貝のカケラも見つけることはできなかった。【参考写真-14①②】

因みに编者の所蔵する東栗子トンネル工事の際に産出したと伝えられるホタテ貝と思われる化石も示しておく【参考写真-15】。



【参考写真-14①】 貝化石産出地付近。仮称「昭和の七曲坂」本線7段目。御沢(オサザワ)手前のカーブから福島側(殉職警察官之碑旧跡)を望む。真ん中左側に岩塊が見える。 H241124



【参考写真-14②】 オサ沢(御沢)手前のカーブ箇所の岩塊(化石発見付近) H241124



【参考写真-15】 ホタテ貝のような化石。
昭和40年4月(S38.6~S41.3 栗子第1(東栗子)トンネル工事)。

当時東栗子トンネル工事を担当していた同僚から昭和40年4月頃頂いたものである。これらの化石の産出状況について『栗子トンネル工事誌』に次のように記されているので若干長くなるが紹介しておきたい。これは、西栗子トンネル米沢側にある千数百年前から住民が住んでいたという米沢市万世町赤浜地区の地名由来についての諸説の一つとして紹介されているものである。

この赤浜地区には、当時西栗子トンネル工事を担当する建設省栗子赤浜国道出張所(S38.4.1~S42.5.31)が設けられていた【参考写真-16】。

「……福島よりの22,950m(编者注:福島市早稲町の国道13号の当時の起点から計画線上の距離)標高548m073(東栗子トンネル福島側入口より1,500m)地表面より約320m地中。福島より21,190m標高522m476(長老沢付近)地表面下約3~4mより**写真**のような貝の化石が出土(産出)するところを見ると、海底が隆起して現状のような地形になったことから「赤浜」の名称が出たのではないかと思われる。」
『栗子トンネル工事誌』(1202頁)。



【参考写真-16】 赤浜集落を国道13号入口付近から望む(東方向)。右下が栗子赤浜国道出張所。見える道路は、古い時代の米沢街道(明神峠道)、正面山奥に明神峠がある。
株式会社川島印刷提供 昭和41年5月

〈参考 栗子峠の地質について〉

ここで多少蛇足気味であるが東栗子トンネル周辺の地質について触れてみたい。興味を持たれない向きには拙文でもあるので読み飛ばされたい。

前にも述べておいたがそもそも日本列島が現在位置にできあがる以前は海底であったようで（さらにその前はユーラシア大陸の東縁の一部）、はるか大昔にそれが隆起してきて現在の日本列島を形づくったそうである。従って、海中生物のヒトデや貝の化石が栗子の山中にあるのもけだし当然のことなのでしょう。

地球は約 46 億年前に誕生したと云われ、地質学上の時代区分がなされている。栗子峠の地質に関連してあまり時代を遡っても意味がないと思われるので、約 2.5 億年前～6,400 万年前の「中生代」と分類される時代から紹介したい（その前の時代が「古生代」）。この時代は、さらに 3 区分（三畳紀、ジュラ紀、白亜紀）に細分化されている。例えば中生代中期の約 2.1～1.4 億年前は恐竜が栄えていたことで有名なジュラ紀である。ジュラ紀の次は、新生代古第三紀へ続いていくことになる「白亜紀」（約 1.4 億年前～6,400 万年前）である。もっともこの時期は、日本列島がまだ存在せずユーラシア大陸の一部であった頃の話である。その中生代の次が現在我々の生きている「新生代」（6,400 万年前～現代）で、古第三紀（約 6,400～2,400 万年前）、新第三紀（約 2,400～170 万年前）、第四紀（約 170 万年前～現代）の 3 区分に分類されている。この内第四紀は、人類の出現に特徴づけられることから人類紀とも、またたびたび氷河期があったことから氷河時代とも云われる。本稿では、我々の栗子峠が生成された新第三紀を主に扱うこととする。

さて、栗子峠付近は奥羽脊梁山脈の南部に位置し、地質学的にグリーンタフ地域と呼ばれていて、上記の地質時代区分で云う新生代の新第三紀の時代に堆積した岩質によってほとんどが覆われていると云う。この新第三紀は、「中新世」（約 2,400～500 万年前）、「鮮新世」（約 500～170 万年前）の二つに区分されている。その中新世の初期から中期にかけては大規模な海底火山活動（グリーンタフ火山活動）が起きたと云う。従って、新第三紀に堆積した岩質について模式図的に云うと、当時海底にあった基盤の古生層花崗岩の上に、海底火山活動による火山砕屑物を主とする岩石がまず堆積した。これらの火山砕屑物の堆積したものを総称して緑色凝灰岩（グリーンタフ）と云う。これは、海底火山活動による熱水変質作用により堆積物が緑色を呈したものである。これらはいわゆる火成岩に分類されるが、それらが堆積した地域をグリーンタフ地域と云っているわけである。模式図の続きになるけれども、グリーンタフ火山活動の終息後、そのグリーンタフ（緑色凝灰岩）の上に後述する泥質の海成堆積物が堆積していき、栗子峠を覆う新第三紀の岩質が形成されることになるのである。

ところで、前述のグリーンタフの載った古生層の花崗岩（福島県内では中生代「白亜紀」に形成されものだ）と云う）は、現在の日本列島の位置で形成されたものでなく、地殻変動によりユーラシア大陸東縁の一部が分離してきた時に、現在の日本列島の位置に移動してきたものだ）と云う。大陸東縁の分離移動により大陸に低地ができ始め、やがて大きな窪みが形成され、海水が浸入してきて日本列島（当時はまだないが）の西側に日本海が誕生したようである。この一連の事件が起きたのは、この東縁の分離移動に関連して新第三紀中新世の初期から中期に起きた前述のグリーンタフ火山活動の時期にあたる。分離が終了した頃の日本はほぼ全域が海に覆われ、地形的に

高い部分が点々と海の上に頭を出している状況だったらしい。日本海側に大規模な堆積盆が出現して、海底となっていた最初の火山砕屑物（グリーンタフ）の上に泥質の堆積物が厚く堆積しつつあった。これが堆積岩となるもので、種々の固体粒子が水中（または陸上）で堆積し固結してできる岩石で化石が含まれることが少なくない。火成岩には通常化石は含まれない。

そして中新世の終わり頃（約 600 万年前）になると日本列島の地殻は隆起し、ことに東北日本では奥羽脊梁山脈の出現により現在見られる地形の骨格ができ始めたと言われる。会津盆地や中通り低地帯も鮮新世中期頃までにはほぼ陸化したと云う。

因みに第四紀は、「更新世＝洪積世」（約 170～1 万年前）と「完新世＝沖積世」（約 1 万年前～現代）に区分される。前に触れているけれども、次節の縄文時代とも関連するので若干説明を加えておきたい。洪積世（更新世）の時代は氷河期があり日本列島は大陸と地続きであったと考えられており、氷河期の終わった 1 万年前沖積世（完新世）には温暖化の影響で海進（海水面が高くなること）が進み、日本列島は大陸から完全に分離され現在のような日本列島が形成されたと云うことである。現在は、日本に於ける土器を伴わない旧石器時代（打製石器）はこの洪積世に存在したと考えられている。磨製石器（新石器時代）と土器を伴う縄文時代は現在約 13,000 年前まで遡ると考えられているが、沖積世の始まりにはほぼ一致する（『いっきに学び直す日本史』安藤達朗 2016 年 3 月）。

なお、大陸の分離や日本列島の隆起のメカニズムについては、1960 年代に確立したいわゆるプレートテクトニクス理論（大陸側プレートに海洋プレートが潜り込むことなど）により説明できるものであるが本稿の範囲と編者の能力を超えると思われるので説明は割愛させて頂く。

（本節は、地質年代など『図説福島県の岩石』（福島県立博物館平成元年 3 月）から多く引用した。そのほか『土木工学ハンドブック』『化石を掘る』ちくま新書・大八木和久 2003 年 7 月、他に関連 Web サイトを参考にした。）

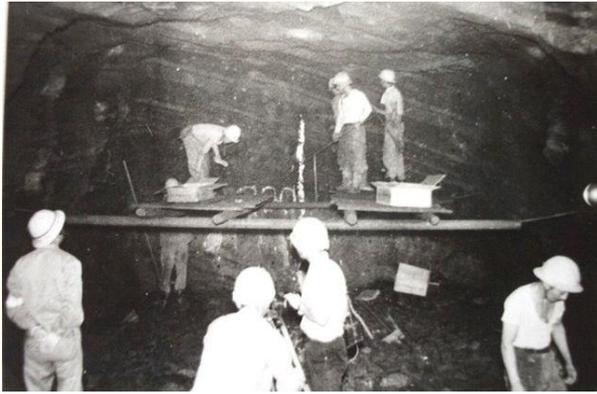
前述のように、栗子峠付近は地質学的グリーンタフ地域と呼ばれほとんど新第三紀に形成された岩質のようである。このうち新第三紀中新世の地層は栗子層と呼ばれ、基盤の花崗岩を緑色角礫凝灰岩と砂岩泥岩互層が覆っている。これら栗子層は上記の解説編でも取り上げているように、まさに海底堆積物であり実際に貝類の化石を産出している。

東栗子トンネルの地質は、調査段階ではほとんどが栗子層の砂岩泥岩互層の中に流紋岩（火山岩の 1 種）が貫入しているものと、米沢側には流紋岩が分布しているものと推定されていた。福島側坑口の露出岩、付近の小川の河床からは硬質で良好な頁岩（泥岩）が見られていた。

東栗子トンネル工事（S38.6～S41.3）の掘削実績の結果は、米沢側坑口付近の流紋岩はほぼ推定通りであったが、その他はほとんどが砂岩泥岩互層で流紋岩はほとんど見られなかったようである。前に紹介している通り福島側から 1,500m 付近の砂岩泥岩互層の中で貝の化石が産出して、これらの地層がかつて海底に堆積していた新第三紀中新世のものであったことが証明された。

【参考写真-17】、【参考写真-15】参照

（本項は『月報東北地建』所収「栗子トンネルの地質について」大木達夫 1966 年 6 月、『栗子トンネル工事誌』を参考にした。）



【参考写真－17】 東栗子トンネル貫通点付近砂岩泥岩互層（福島側坑口から約 1,200m 付近 S38.10.15 貫通）。
貝化石産出地はこの先 300m（福島坑口から 1,500m）

(2) 銅鉱石について

今回は、高野副会長さん所蔵の銅鉱石が展示されている。これは大滝鉱山産出のもので、昭和 30 年代の始めに副会長さんの祖父が採取したものだという【写真太古－3】。

ところで前にも触れているけれども、鉄道の奥羽線開通後（明治 32 年 5 月）大滝は、宿場町として役割を終えた明治 30 年代後半から大正始めにかけて、中野鉱山や蛇体鉱山、前述の大滝鉱山等が相次いで操業し大滝地区にはちょっとした鉱山ブームが訪れたという。大滝地区を含め旧中野村における銅鉱山の実態について、開山閉山時期は勿論のこと従業員数やその産出高など詳らかでないけれども、各鉱山について編者が得ている情報を整理しておきたい。



【写真太古－3】 銅鉱石、旧大滝鉱山から昭和 30 年代に採掘したもの。

まず蛇体鉱山についてであるが、旧国道 13 号旧西川橋付近から茂庭に抜ける蛇体道の奥に小字名蛇タイ（旧茂庭村、前掲書『福島の小字』）と云う場所があるのでそのあたりに所在していたと思われる。採掘は終戦近くまでおこなっていたようで、現国道 13 号西川橋の直下（蛇体道入口）には鉱石の集積場もあったと云う（「大滝の皆様に聞く会」平成 23 年 9 月 4 日）。この蛇体鉱山の



手前には末松鉱山というものもあったけれども、埋蔵量が少なかったらしく間もなく閉山になっているようだ。蛇体鉱山から西川橋下の集積場までの鉱石運搬は牛の牽く土轎によりおこなった。

【参考写真－18】 旧西川橋福島側から蛇体道を望む（現国道 13 号西川橋真下）。正面、東北中央自動車道新西川橋。その上に見えるのが栗子トンネル工事ズリ出し用ベルコン。奥に見えるのが工事用仮棧橋。H241118

道には丸太材や半割材を敷並べ、場所によっては油を引いたと云う【参考写真-18】。鉱山作業員の宿舎は、大滝集落近くにもあったようで家族も住んでいたという（大滝会高野英治副会長談）。

なお、鉱山の施設（作業所や宿舎）は、近くの鳥川からすがわの左岸にあったようで戦後昭和 21 年 6 月、現在福島市土船にある社会福祉法人青葉学園（児童養護施設）が鉱山の旧施設（宿舎等）を利用して創設されている（同年 10 月大桁地区おおげたへ移転、後述）。創設にあたっては、大滝集落の住民も協力したという（大滝会 HP「青葉学園」を参照）。

次に中野鉱山は、旧国道 13 号（現国道 13 号中野第 2 トンネルの北側小川沿いの急崖地きゅうがいにあり）の西大桁地区小川の対岸（左岸）にあり戦後も昭和 30 年代にかけて操業していたようである。中野鉱山へは、旧国道 13 号大桁がんげ（急峻な崖を意味する方言）地区は現在崩落していて旧道は一部喪失しているけれども、その西側の西大桁地区付近（このあたりが大滝集落までの区間での道路の最高標高点になる）から小川の川岸の方へ急勾配の山道（幅 2m 程度）が設けられていてそれを下って行ったそうである。その山道は手押しのポンプ車程度は通れたようであるが自動車は通れなかったらしい【参考写真-19①②】。



【参考写真-19①】 旧国道 13 号（旧万世大路）西大桁地区。米沢側を望む。旧中野鉱山への山道はこの付近の右側。 H240506



【参考写真-19②】 復元された旧国道 13 号（万世大路）泥足袋（どろたび）から西大桁方向（福島側）を望む。旧中野鉱山は写真左下、小川対岸（左岸）。 H240506

中野鉱山の坑口は、小川の左支川赤金沢口（福島側）のそばにあり、小川には木橋が架けられていてそれを渡って鉱山の採掘現場へ向かったと云う。採掘された鉱石は、その橋を利用してトロッコで手前（右岸側）に運ばれてきて集積され鉱石と土石類に分別され、鉱石の方はカマスわら（藁で作った大きな袋）に入れて、人が背負って旧国道 13 号まで運び上げたと云う。高野副会長の話しによれば、戦前小学生の頃学徒動員で毎日午前中何度も運ばされたそうである。橋を渡って鉱山のある大桁地区の対岸は小字名がその名も「銅どう」となっていることから銅が産出すると云うことは古くから知られていたのかもしれない。従業員は数十人は居たようで、鉱山従業員の子弟が大滝分校へ通学していたそうである。昭和 38 年頃編者が、鉱山近くの旧国道 13 号を通行した際に先輩から銅鉱山がある所だと教えて貰った記憶がある。この中野鉱山は戦後一時操業を停止していた時期があって、丁度その時期に前述の青葉学園が、大桁地区にあった中野鉱山の施設（宿舎等）に移転してきたようである（昭和 21 年 10 月～昭和 23 年 10 月まで 2 年間所在、このあと

赤岩道の菱川^{まないたやま}山に移転)。中野鉱山は昭和 24 年頃操業を再開しているという (大滝会 HP「青葉学園」を参照)。昭和 25 年 6 月には朝鮮戦争が勃発しいわゆる朝鮮特需が起きているので鉱山の再開と関係があるかも知れない。

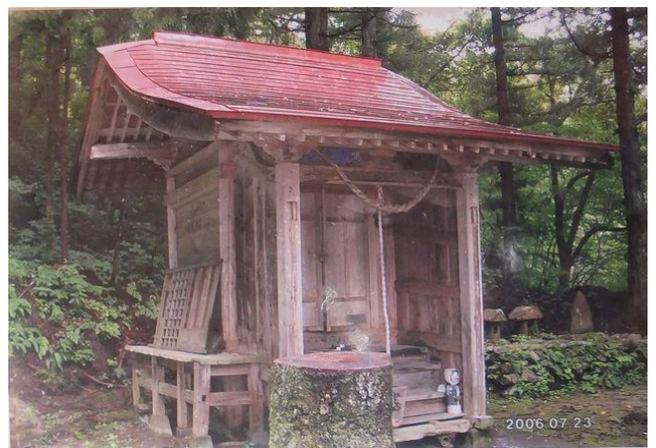
なお、栗子国道 (栗子ハイウェイ) 改築工事 (S36.10~S41.5) の際に「大宝^{おおたから}鉱業 KK (本社秋田市) の中野鉱山事務所および宿舍、機械室等の移転があり、営業補償等を含めて」(『栗子トンネル工事誌』1066 頁) 移転費を支払っているようである。それらの場所については明記されていないけれども旧みちのくドライブインの手前左側に事務所、その手前 (福島側) 右側の道路下に所長宿舍等あったと云う (大滝会 渡辺チヨ役員談)

今回展示物銅鉱石産出の大滝鉱山は、葭沢地区にあり旧葭沢橋下流百数十^{ほど}の小川右岸にある。

【参考写真-20】。



【参考写真-20】 写真中央、大滝鉱山跡(小川右岸)。葭沢地区旧吉田まんじゅ屋さん 対岸 H240506



【参考写真-21】 大滝山神社旧社殿。高野英治副会長 撮影提供。平成 18 年 7 月

小川には、当時木橋が架けられていたそうである。大滝鉱山は、当初は銅鉱石が露出し品位も高く、採掘運搬も便利だったようである。戦前昭和の初期には露天掘りもおこなわれるなど大規模に採掘されていたらしい。このことから大滝鉱山は莫大な利益をあげ、浮浪の身であった発見者 (創業者) は 1 獲千金を得て鉱山成金となったと云う。その創業者の三ツ石 (光石) 三平氏は、後に山神神社の社殿を造営寄進したと伝えられている【参考写真-21】。しかし、大滝鉱山の埋蔵量は少なくその全盛期は長く続かなかったようである。戦後は残存鉱石を細々と採取していたようであるがやがて廃鉱となり、サツマイモや里芋等根菜類の貯蔵所として地区の方々に利用されていたと云う。その鉱山の川向 (左岸、手前) には、鉱山の作業員を相手とした^{まんじゅ屋} (吉田) さんが、かつて店を開いていたというから大滝鉱山には相当数の従業員が働いていたのであろう。

(本節は『わが大滝の記録』(昭和 52 年 1 月)、「大滝会 HP」及び大滝会高野英治副会長談話を参考に整理した。)

(3) 縄文土器のことなど

この大滝の山の中でも縄文時代の土器が見つかるということについては以前大滝会 HP 管理人紺野文英氏からも聞いていた。しかし、どうしてここに縄文人が住んだのか疑問を禁じ得ないところであった。

今回は、土器の文字通りのカケラと^{やじり} 鋸片が一つずつなので、それを以て縄文時代の遺跡があったと決めてしまうのは早計であろう。結論は、それなりの調査をしてからでなければ出せないと思われる。それはさておき、この土器片は、高野副会長さんが戦前小学生の頃に畑地の中から見つけたものだそうである【写真太古-4】。



【写真太古-4】 石鋸(やじり)及び土器破片



【参考写真-22】 右上から小川に流れ込む左支川長老沢。その上の杉林にかつて畑があったと云う(縄文土器ややじり出土地。旧みちのくドライブイン川向かい、現大鍋橋約 250m 下流にあり。小川上流側を望む。H281204

その場所は、朴沢地区にあった旧みちのくドライブインの川向だと云う。小字名長老沢の名の由来になったと思われる現在でも水流の結構ある長老沢が小川に流れ込むところで現在は杉林になっている【参考写真-22】。昭和 50 年代の地形図(編集図)を見ると確かに畑地になっている(次項の赤岩道入口付近も同じく畑地表示あり)。

大滝地区では、その他に縄文土器や石器類が赤岩道の入口付近【参考写真-23①②】や福寿草山【参考写真-24】の畑からも出土したと前記紺野氏からの情報である。



【参考写真-23①】 赤岩道入口付近、入口方向(旧国道 13 号)を望む。写真右側が畑地の跡と推定。上に見える防雪柵は現国道 13 号(右福島側)。 H241104



【参考写真-23②】 大滝地区全景、共同墓地付近から望む。左の道路が赤岩道で左端に畑地が見える(出土地)。手前の道路は旧国道 13 号(万世大路)。昭和 40 年代前半(栗子ハイウェイ S41・5 開通以降)。大滝会 榎木新吉副会長撮影提供。



【参考写真－24】 福寿草山跡(中央切土箇所)を福島側から望む。中央の舗装道路が残存旧栗子ハイウェイ(S41・5 開通)。現在東北中央自動車道チェーンベースで盛土造成済み。当該箇所は大滝橋に付替られた。左下大滝集落進入路(ほぼ明治期万世大路)。 H250503

また小学校 5.6 年頃、大滝分校の加藤栄先生（在任期間 S31.4～S35.3）が収集に熱心で時々屋外授業と称して赤岩道入口の畑や福寿草山の畑に石器や土器を探しに行かされたそうである。また畑からそれらが出土すると畑の持ち主が加藤先生に届けてくれたりもしていた。

それらの畑地からは、数多くの土器片、石鏃^{せきぞく}(やじり)などの石器類が出土していたようである。石器類の中には、長さ 20 cm 程もある石槍^{いしやり}やナイフ状のもの（石匙^{いしきじ}）もあったと云う。

これらの石器や土器が今現在どうなっているかは、加藤先生は既に故人であり全く不明である。

現物を見ているわけではないが、石鏃等の材料となる黒曜石は大滝（と云うより福島県内）にはないので他地域との交流があったことが想像される。これらの情報と、高野副会長さんの土器片等の発見と併せて考えると、大滝には確かに縄文人が生活を営んでいた公算が大きい。公的な埋文調査はおこなわれていないようなので縄文遺跡の存在を断言することは勿論できないことではある。

ところで、編者が昭和 30 年代初めの中学生の頃土器拾いに夢中になっていた時期ある。その場所は、現在の国道 4 号福島南バイパスの渡利地区で、周りも住宅地となっているがそこはかつて福島農蚕^{のうさん}高等学校の桑畑のあった場所である【参考写真－25】。



【参考写真－25】 国道 4 号福島南 BP、仙台方向を望む。トラス橋は、阿武隈川を渡る大仏橋 (L=218.3m)、手前渡利地区、下り車線 (写真左) S47・12 完成供用 (着工 S45・11)。写真下の BP 部や住宅地は旧福島農蚕高校の元桑畑(山ノ下遺蹟)。昭和 51 年頃撮影。『60 年のあゆみ』より

縄文土器の破片がごろごろしていて耕作上邪魔だったのであろう畑の隅に集められたものが山になっていた。中には石器類も交じっていた。土器片の中でも口縁と思われるものには立体的な華やかな飾りのあるものが多く縄文中期（5000～4000 年前）のものと当時聞いたと思う。土

器を拾って持って帰っても誰からも咎められることはなかったし勿論持ち出し禁止等の注意看板などはなく古きよき時代であったと云うことであろう。この場所が「山ノ下遺跡」(縄文後期、平安時代)と云う場所だというのは随分と後に知ったと思う。後年(昭和45年頃)、編者はその福島南バイパスの改良工事の発注(設計積算等)を担当したことがあった。当然ながらその際当該箇所は、埋蔵文化財包蔵地ということで工事発注前に埋文(埋蔵文化財)調査をおこなっている。昔土器拾いをしたところでもあるので、担当者として興味深く報告書を読んだ記憶がある。「山ノ下遺跡」という遺跡名は全く記憶にないけれども、縄文土器に加えて「土師器」(平安時代)も出土したと云う報告があったことを覚えている。福島市の縄文遺跡は、国指定史跡となっている4500年前の宮畑遺跡(福島市岡島)を始めあちこちに多く分布しているようである。

と云うことで話を戻すと、道路工事に先立っては埋蔵文化財包蔵地の調査を必ずおこなわなければならないので、特に福寿草山は切土してなくなってしまう道路(国道13号)本体箇所であり埋文調査をするべき場所と思われるけれどもそれらについての記録はないようだ。大滝地区が現在どのような扱いになっているのか承知していないが、当時としては埋蔵文化財包蔵地として認識されていなかったのであろう。福島市飯坂町茂庭に平成4年10月から工事が始まっている摺上川ダム(平成17年9月完成)の方では大々的に埋蔵文化財調査がおこなわれ、縄文時代初め(草創期)からの遺跡が確認されている。茂庭にも縄文人がいたのであれば、我等の大滝にも縄文人がいたとしても決しておかしくはないであろう。

ところで縄文(文化)時代というとBC8000年(10000年前、沖積世の始め)からBC300年(2300年前、弥生時代の始め)まで約8000年間続き、早期(10000～6000年前)・前期(6000～5000年前)・中期(5000～4000年前)・後期(4000～3000年前)・晩期(3000～2300年前)の5期に区分されると覚えていて、縄文時代は非常に貧しい狩猟採集の原始時代と云う認識であった。しかし、最近の研究結果では、その上限はさらに3000年から5000年^{さかのぼ}り(NHKTVアジア巨大遺跡第4集「縄文奇跡の大集落」H27.11.8放映)13000～15000年前から縄文時代が始まったとされているようである。その始まりは、草創期(～10000年前)と区分され、現在縄文時代は6期に区分されている。

蛇足であるが、縄文時代に続く弥生時代もおおよそBC300年(2300年前)～AD300年(1700年前)位までの約600年間という認識であったけれども、最近では、紀元前6～5世紀ごろから紀元3～4世紀(2600～1600年前)とされていてその始まりが縄文晩期まで遡るようだ(『いっきに学び直す日本史』)。

この縄文時代は、何と云っても縄目の表面文様に代表される世界最古の土器(素焼)を生み出したことに特徴づけられている。土器の発明によって、食物の煮炊きや貯蔵・保存が可能となり、縄文人の文化を飛躍的に発展させたと云う。縄文人は、貧しい生活を送っていたと思われていたが、極めて豊かな文化的な生活を営んでいたと現在は考えられている。いわゆる4大文明と云われるエジプト文明(BC2650年頃ナイル川流域)・インダス文明(BC2500年頃、インダス川流域)・メソポタミア文明(BC1730年頃、チグリス・ユーフラテス川流域)・黄河文明(BC1300年、黄河流域)を^{しの}凌ぐ安定的な社会を1万年以上も持続させた奇跡的な文明だとさえ云われている(同上NHKTVなど)。

我等の大滝でも縄文時代には、茂庭遺跡等の発掘調査の結果等を見ると、春はワラビやゼンマイなどの山菜が採れ、夏は魚を捕り秋にはマスやサケも遡上^{そじょう}してきたかも知れない。秋は、クリ、クルミ、^{やまぶどう}山葡萄などの木の実を採取、冬はイノシシやシカ等の狩りをして、豊かな自然の恵みを享受^{きやうじゆ}していたと思われる。大滝地区は縄文人にとってとても住み易いところだったのであろう。長老沢地区が胡桃^{くるみ}平^{みだいら}と呼ばれるのも豊富なクルミやクリがあった縄文時代の名残かも知れない。また、縄文人は衣服を装い髪飾りや耳飾りなどのアクセサリーを身にまといポシェットを持つなどおしゃれを楽しんだようである。

一片の土器片から大滝の縄文時代をあれやこれや想像できて面白い。

(本節は主に『ふくしまの歴史1 原始・古代』福島市平成17年10月による。その他の参考図書『ふくしまの曙』歴春福島文庫④、『日本の歴史1』中公文庫1973年10月、『日本史小辞典』文英堂、『世界史小辞典』文英堂、他)。

おわりに

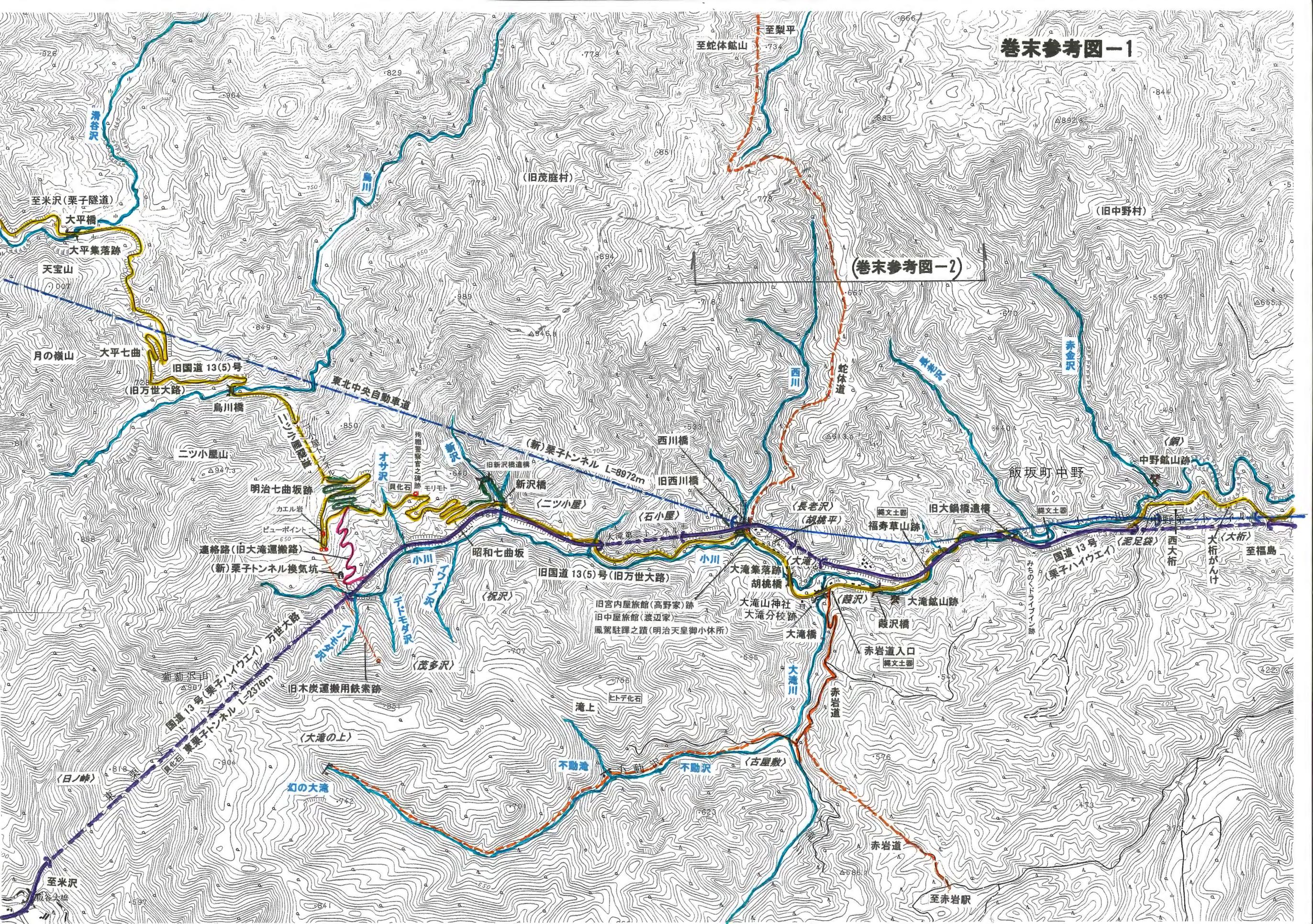
今回は、飯坂文化祭の単なる報告にとどめず浅学^{かえり}を省みず編者の勉強を兼ねて日頃より興味のあることについて整理してみました。もとより編者の能力不足により十分なものとは思っていないが諸賢のアドバイスを頂ければ幸甚です。

報告を整理するにあたっては、大滝会木村義吉会長、高野英治副会長をはじめ役員の皆様には資料の提供ばかりでなく幾度もの問合せにも関わらずご多忙の中ご親切に回答をいただきお礼を申し上げます。また、「古さと絵画」の掲載について快諾頂きました大滝会の画家女史にもお礼を申し上げます。

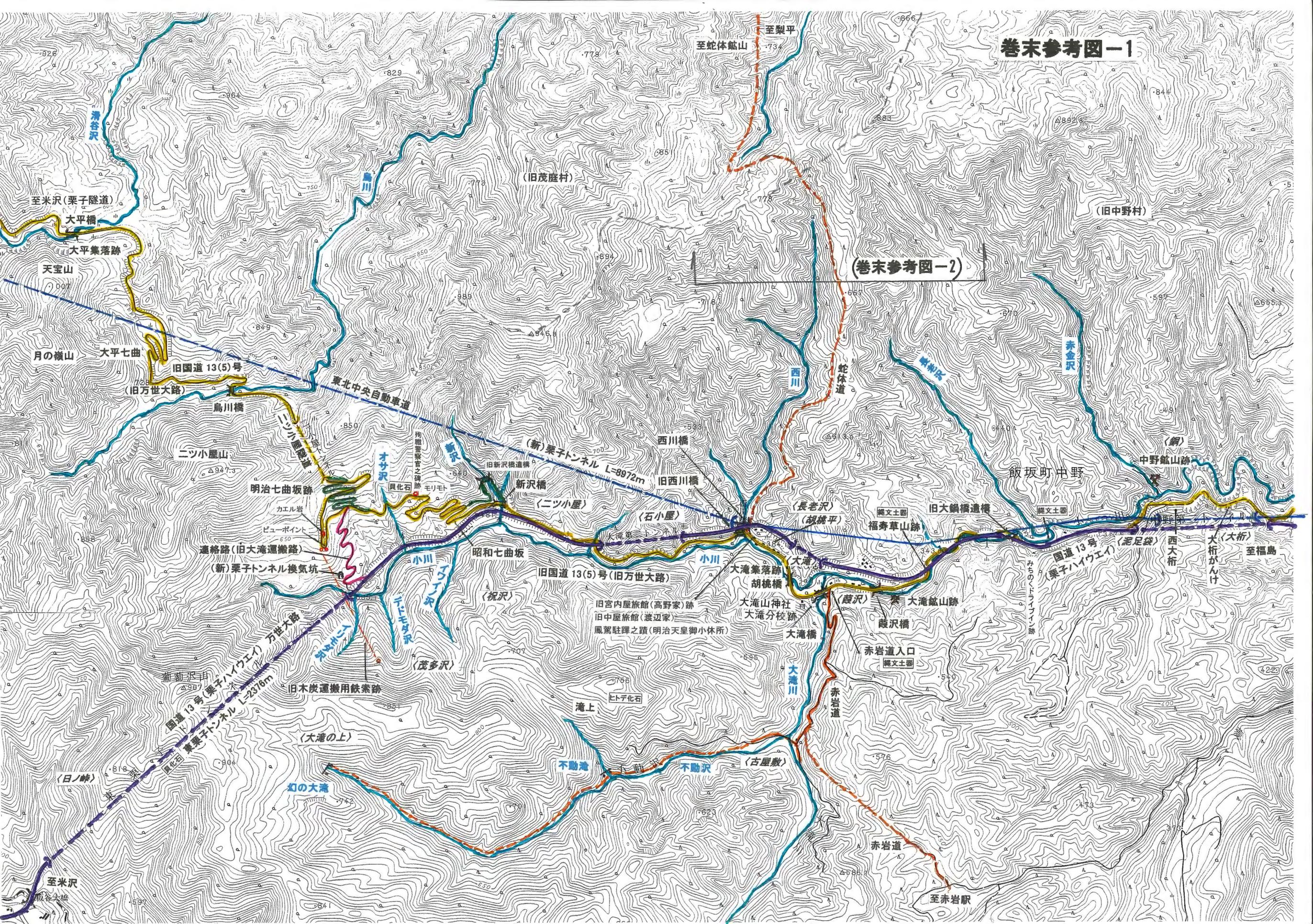
そして今回もまた大滝会 HP 管理人紺野文英氏には貴重なご助言頂き、かつご多忙の中、本稿の編集(写真配置等)をして頂きました。衷心より感謝申し上げます。

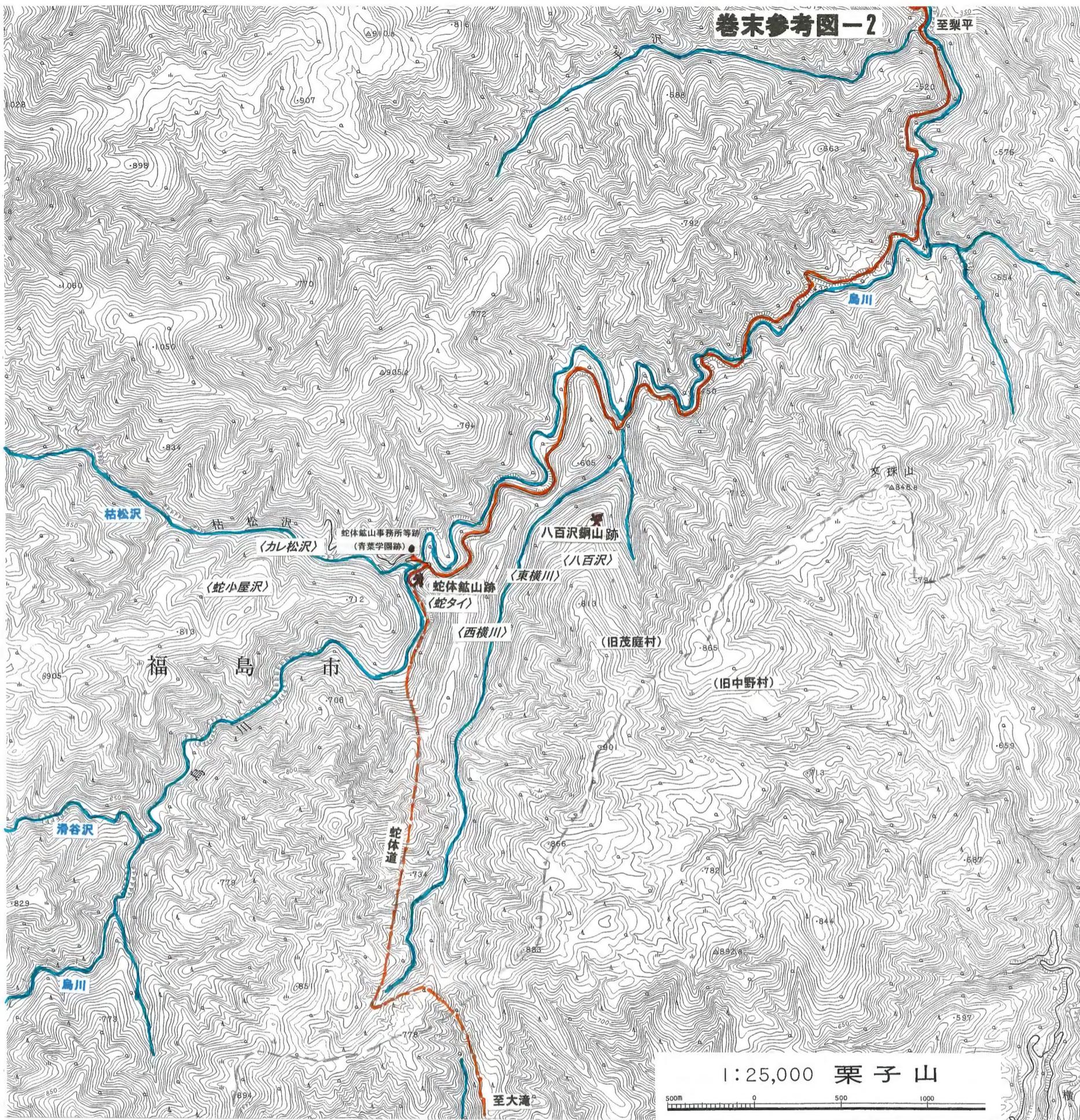
- 完 -

巻末参考図-1



巻末参考図-2





【備考】

1. 「蛇体道(仮称)」「赤岩道(仮称)」は、5万分の1地形図(明治41年、昭和28年)及び実績(大滝会HP等掲載軌跡図:山口屋散人様、おばら様)を参考にした推定線である。
2. 「不動滝」「幻の大滝」への登山道は実績(大滝会HP等掲載軌跡図:山口屋散人様、おばら様)を参考にした推定線である。
3. 「蛇体鉱山」「中野鉱山」位置は、明治41年の5万分の1地形図(採鉱地地図記号あり)及び大滝会会員の談話を勘案し推定したもの。大滝鉱山位置は大滝会会員の談話による。各鉱山名称は『わが大滝の記録』によった。「八百沢銅山」の位置名称は明治41年地形図による。
4. 旧信夫郡中野村・旧伊達郡茂庭村の村界は5万分の1地形図(明治41年、昭和28年)による推定線。また〈小字〉は、『福島の小字』(福島市史資料叢書第38輯)、『實測繪圖面』(岩代国信夫郡中野村)、地籍圖(岩代国伊達郡茂庭村)による推定地。
5. 巻末参考図-1・巻末参考図-2は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図(栗子山・板谷)を使用しました。